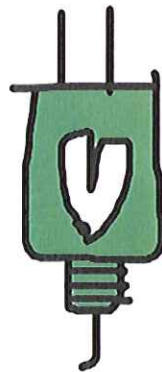
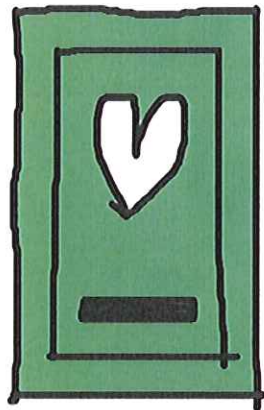
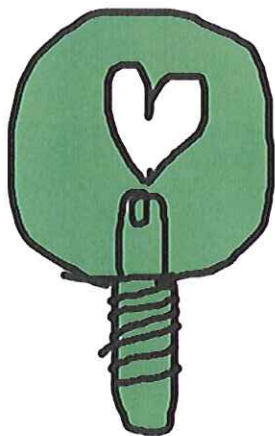


# 入賞作品集

NPO法人 地球こどもクラブ

第22回小学生・中学生作文コンクール



2012 WINNERS

Non Profit Organization The Children of The Earth's Club  
Essay Contest for Elementary and Junior High School Student

# 入賞者一覧

## 内閣総理大臣賞

『わたしが元気なわけ』

十河 あや 福岡県福岡教育大学附属福岡小学校4年生

## 外務大臣賞

小学生部門 『あなたが地球の一員ならば…』

新城 琉妃 沖縄県宜野湾市立普天間第二小学校5年生

中学生部門 『私にもできる事』

上村 莉愛 愛知県知立市立竜北中学校3年生

## 文部科学大臣賞

小学生部門 『日本発「SET「SUDDEN」魂」〜「節電」から「切電」へ〜』

坂井 敏法 新潟県新潟市立万代長嶺小学校6年生

中学生部門 『心の灯』

高城 美帆 神奈川県慶應義塾湘南藤沢中等部1年生

## 環境大臣賞

小学生部門 『節電大臣』

鈴木 廉 福島県会津若松市立謹教小学校6年生

中学生部門 『私達の生活と節電』

大久保 有紗 和歌山県近畿大学附属和歌山中学校2年生

## 地球こどもクラブ賞

『二人の二歩から』

古山 佳保里 静岡県西遠女子学園中学校2年生

## 内閣総理大臣賞

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校 4年生

『わたしが元気なわけ』

十河 あや

去年の冬は、わたしの住んでいる福岡ではめずらしく、雪がたくさ  
んふって寒かった。わたしの通っている小学校にはヒーターがある。み  
んなが安心して勉強できるように、十二月と二月は朝早くから  
教室をあたたためてくれている。二年生の時まで、寒い日の休み時間は  
教室で絵をかいたり本を読んだりオセロやトランプをして遊んだ。  
でも、二年生だった去年はちがった。朝、教室に入るとあたたかくて  
ホツとするのは同じだったけれど、二時間目が終わった後の中休みと、  
給食が終わった後の昼休みになると先生が、

「まどをあけてー。」

と大きな声で言う。みんなで教室のまどとドアを全部あけると風が  
ピューッと入ってきて足ぶみをしたくなる。

「さあ、みんな運動場に集合。」

のかけ声を合図に、クラス全員が教室からとび出してくつ箱へ早足で  
行く。くつ箱から外へ出たしゅん間は、

「寒いー。」

の大合唱だけれど、運動場でおにごっこや大なわとびをすると、寒さ  
なんか忘れてしまう。休み時間はたった十分間と二十分間だけれど、  
思いつきり体を動かすから、ちよつとくらいつめた風がふいても寒いな  
んて感じないくらい体がポカポカしてくる。だからわたしのクラス  
は、ヒーターを消している日が多くなった。外で走り回ったり大なわと

びをしたから、先生ともたくさん話ができたし、クラスの男子も女子  
もみんながけんかをしてないで仲よしなんだと思う。雪がチラチラと  
ふって、ものすごく寒い日は、教室でじっとしていたと思ったことは何  
度もある。でも、先生の「行くよー」の声をきくとやっぱり外へとび出  
していつてしまう。

わたしは、去年の冬から今年のインフルエンザの大流行に負けず、  
元気に学校へ行けた。毎日いっしょに登校していると、なりのクラスの友  
だちは、二回もインフルエンザにかかってお休みしたのに、わたしは0回  
だった。これにはわたしの家族みんながおどろいた。なぜならば、わた  
しは二才の時から二年生まで毎年二回以上、多い時は二回もインフルエ  
ンザにかかって学校を休まなければいけなかった。

休み時間にまどをあけて部屋の空気を入れかえている間、みんな  
で外でおもいつきり遊ぶという方法は大成しようと思った。クラス全  
員が外に出るから教室の電灯は全部消しておけるし、みんな体中が  
ポカポカになるからヒーターはつけなくていい。いつもみんなで笑いな  
がら遊ぶから仲よしになれるし、病原さんがどこかにとんでいつちゃ  
うしいいことだらけだと思う。四年生になっても、先生とみんなを外で  
元気いっぱい遊びたい。

# 外務大臣賞

小学生部門

沖縄県 普天間第二小学校5年生

『あなたが地球の一員ならば…』

新城 琉妃

〃節電〃

それは、地球上の人々にとって切りはなしてはいけないものだと思う。う。

人は豊かさを求めすぎている。

生活を、便利にしようというのはいいことなのだが、今はそれを越え、同じ地球上の生物を断崖の絶壁に追いこんでいる。自分のためなら、自然を踏み荒らしてまでも進み、わなをしかけ、生け捕りにする。その自己中心的な思いや考えが、地球破壊へと、つながったのだから。う。

人は自然から「緑のダム」や「なま物を土にかえずカ」や「水の循環」など教わっている。長い間自然の恵みをうけてきた。だから、自然の中から省ける生活の知恵を知っているはずだ。例えば、夏には必需品ともいわれるクーラー。本当に必要なのだろうか。

人は、ずすしくなりたいたいときに、あおいで風をおこし、空気の流れを作り、ずすしさを感じているだろう。他にも、窓をあけて風とおしをよくする、緑のカーテンで日ざしをさえぎる、ぬれたタオルを首にまくななどがある。この方法なら、高度な技術やせんさいな能力も必要はない。

人はいままで、求めるものだけに目をつけ、わき目もふらずはしりにはしってきたが、今が立ち止まって見直す、最初で最後のチャンスだ

と思う。

絶望の道を歩むのか、見直して生物と人がかわれる地球にするのかは二人一人が決めて進んでいかないとはいけない。でも、耳をすませ、目をつぶると、どこからともなく動物のSOSが聞こえてくる。

遠くから、山を越え、谷を越え、海を越えて。切りだされる木。わなにかかる動物。生け捕りにされる動物。酸性雨で住めなくなる魚。すみかをうばわれた動物。

このSOSを聞き、どう思い、どう考え、どう感じ、どう行動するのか。人は動物が話せないかわりにお互いに分かち合うこと、そして、節電だけでなく、より深く地球を知ることが大切だ。

先人たちの教えて、一つからなる生態を二つでもむだにはしないという言葉がある。これを私たちは実行し、後世につなげていき、自然をみじかに感じ、知り、ふれてみる事で「自然と人との共生」について学ぶことが出来ると思う。

一人の力だと二人の力で消えてしまう。でもそこで二人二人と地球を救う人数がふえれば、きっと地球はかがやきだすだろう。他人にまかせではダメだ。

もう、SOSとはいわせない。

青い、すんだ光をはなつ地球を、人の欲望や、人が生活をするためにといった都合のいいような考えで、みんなと生き物と地球をつつんでほしくないから。

## 外務大臣賞

中学生部門

愛知県 知立市立竜北中学校三年生

### 『私にもできる事』

上村 莉愛

「关灯！」これは中国語で、意味は電気を消しなさい！私が四年前に中国から来日してから、もとも母から言われた小言だ。

母はケチだ。毎日のように小言を言う。まるで光熱費の事しか頭にないようだ。中国では、私は節電という事に全く興味がなかった。

しかし、東日本大震災の後から考え方が変わってきた。今まで当然の様に使ってきた電気が節電しないと停電してしまうというのだ。私は突然、節電しなければ、と実感した。

我が家は五年前から既に太陽光発電をつけてある。家の中の電気はLEDの物もある。

私は手始めに身近な物から節電をしようと思い、自宅の家電製品リストを作成した。使用頻度を、大、中、小に分けて、それに沿って節電対策を取り込んで実施した。

まずは項目には、不要な照明を消す。パソコンの電源はこまめに切る。節電タップを使用して、必要な時だけ電源を入れる。携帯電話の充電完了後は充電器を抜く。次に項目二には、寝る時、豆電球のつければなしはしない、炊飯器の予約はしない。

一番気になるのは項目三だ。発見した事がある。電気ポットだ。全く必要ない。お湯が欲しかったらヤカンで沸かす。その方が安いのだ。電気ポットはしまうことにした。

冬季には暖房をつけず、セーターを着て、ひざ掛けをして過ごす。夏季には冷房をつけず、扇風機を回す。こうして、1ヶ月の電気使用量がなんと七十kWhもダウンした。

また何か節電ができる事を探してみると、食事をする時、テレビを消す事だ。そうすると、家族での会話も増えてきた。

しかし、やはり夏の節電は困難だと感じる。そこで、昨年すだれを購入してみると、涼しい！先日植えた苦瓜の種は少し芽が出てきて、今年も緑カーテンの完成を楽しみにしている。

とうとう、もうアイデアが尽きてしまった所で、私は、中国に三犬かまどとして有名な暑い場所・武漢に住んでいる祖父母に聞く事にした。武漢の夏は、皆が竹ベッドを外に出して、水撒きをしくつろいだりする。日本で竹ベッドの代わりに私はベッドにござを敷いてみる事にした。すると背中中に隙間ができて涼しいのだ。また、ベランダにも水撒きをして、涼しきアップ！

そして、私は日本での経験を祖父母に伝えたいと思った。中国でも指折りの熱い街武漢で冷房は欠かせないが、二八度を設定し、就寝時は扇風機だけにする。そうしたら、祖母から朗報が届いた。「ずっと悩まされていた腰痛がなくなっただけ」とても体にも健康だ。

私に技術的な面は伝える事ができないが、せめて両国の日常生活でもできる節電のコツを伝えたいと思う。そして、日中両国の節電友好交流に役立つように努力したい。

# 文部科学大臣賞

小学生部門

新潟県 新潟市立  
万代長嶺小学校 6年生

『日本発「SETSUDEEN」魂〜「節電」から「切電」へ〜』 坂井 敏法

ぼくが電気の大切さについて、初めて考えるきっかけになった出来事がある。それは今から七年前の十二月。ぼくが保育園にいた時、突然停電になったのだ。先生やみんなと布団にくるまったけれど、寒さと心細さで胸は不安いっぱい。

家に帰って家族に会えて「安心。でも暗くて寒くて、このまま電気が一生つかないんじゃないかと考えたら、涙が出た。その時、ふと思った。もしかして、地球が怒っているんじゃないか…と。

なぜって、ぼくがテレビゲームを長時間やっていた時や、夏にエアコンの温度を下げすぎた時などにお母さんがいつも勝手にスイッチを切っていたからだ。そんな時、お母さんは必ず、「こう言ったら怒った。」

「電気をむだにしちゃダメー大切にしなさい。」  
だから停電の時、ぼくたち人間が電気をむだにした罰として、地球が勝手に電源をオフにしたのだと真剣に思ったのだ。お母さんにそのことを伝えたら、

「いいことに気がついたね。その通りだね。」

と言って、ぼくをギュッとだきしめてくれた。

ぼくは心も体も温かくなった。そして誓った。よし、絶対に電気を大切に使うぞ、と。ぼくの固い誓いに応えるかのように、電気がついた。ありがとう、電気。そして、地球…。

ああ、それなのに。三日坊主とは、ぼくのことだ。電気が正常になる

とすぐに、ぼくはまた以前の電気むだ遣いっ子にもどってしまった。見えないテレビもつけ放し。暖房の温度は上げすぎたり。

そして翌年の七月。グラツ、グラグラツ。中越沖地震が発生。床をはってテレビをつけると、ぼくの目がくぎづけになった。何と柏崎刈羽原発の施設に火災が起きている。真っ黒で巨大なけむり。ぼくの心はこおりついた。

地球は本気で怒っている…。ぼくは今度こそ心を入れかえ、真面目に節電を心がける決心をした。家族会議を開き、見ないテレビは消す・冷暖房の温度は適温にこまめに調整する・冷蔵庫の開け閉めは素早くするなど、わが家のむだ追い出し作戦を話し合った。

できるだけ「部屋で家族」緒にすこすようになったので、家族仲良し度が上がり、幸福感もグンと増えた。節電とは地球に優しくすること、それは人を思いやることにもつながっているのだと、改めて実感した。

でも…起こってしまった昨年の福島県での原発事故。これは地球規模で節電しなければいけないのだという、地球のぼくたち人間に対する最終宣告なのかもしれない。

不要な電気は「切り」、電気を「大切に」する「切電」。悲惨な原発事故が起きた日本だからこそメッセンジャーになる使命がある。

今、「切電（SETSUDEEN）」の魂を世界へ向けて発信しよう。それがぼくたちを創り出してくれた地球への最高の恩返しになるはずだ。明るい未来。それは、ぼくたち人間の強い志で築き上げていくものなのだから。

# 文部科学大臣賞 中学生部門

神奈川県 慶應義塾湘南藤沢  
中等部1年生

## 『心の灯』

高城 美帆

節電。それは、今までは考えたこともなかったことだった。二〇二一年三月一日、この日まで。

この日、私は午前授業で学校から早く帰って二人で家に居た。そして、忘れもしない午後二時四十六分。

大地の揺れは私を悲しみにつき落としました。揺れはいつまで続くのか、家族は大丈夫であるか、などと思いつながら、混乱して、頭が真っ白になった。生まれて初めて直面した地震の怖さであった。同時に、心からの恐怖を今までの人生で初めて味わった。

しばらくして、揺れがおさまり始めたので、両親の携帯電話に電話をかけたが、つながらない。テレビの電源を入れたが、不思議なことに、動かない。どういふことか。動揺しながらも、私は家中のありとあらゆる場所の電気のスイッチを押してみた。しかし、電気はどれ一つとして、つかなかった。停電だ。私は今までにない孤立感を感じた。地震に停電が重なり、大きな不安から重圧がかかり、私は泣いてしまった。そのとき、独りぼちの辛さ、悲しみをしみじみと感じた。普段、何気なく使っている電気のありがたさ、そして、日常生活を送れることこそが、奇跡なのだと思います。当たり前なのに感謝した日であった。

昨年は、限られた電力を大切に使うということが社会全体の目標となった。我が家でも、普段の生活を見直し、冷房の設定温度を二十八度に下げた。また、植物観察も兼ねて、ゴーヤで緑のカーテンを作っ

た。その結果、翌月の電気料金の明細を見ると、昨年よりも、千円も代金が安くなっていた。微々たる努力が、結果として、実を結んで嬉しくなった。

ところで、日本はほどよい気候と自然に恵まれているが、災害がおきやすい国である。そのため、震災の経験を生かし、自然エネルギーを有効活用するべきだと私は思う。電力を作るための原料としては、化石燃料が挙げられるが、これは使えば使うだけ、資源が減る。二酸化炭素を発生して、環境に対しても、悪影響をおよぼしている。一方、自然エネルギーは、エネルギー源が無限にあり、資源に困ることはない。二酸化炭素などの有害物質を出さず、環境に優しい。しかし、自然エネルギーによる発電はコストが高く、課題が多いと思う。それを改善するため、今後、開発が進むことを期待している。

震災という忘れられない出来事とおして、電気とは、ただ物を照らすだけではない。人の心にも灯をともしものであるのだと身にしみて感じた。しかし、電気は無限にあるものではなく、限りあるものだ。その貴重な宝をみんなで分け合い、大切にすることがあると私は思う。だから、電力需要が供給量を上回ると言われている今年も、節電をして、国民の絆をより一層、深められたらいいと思っている。がんばろう、日本。

# 環境大臣賞

小学生部門

福島県

会津若松市立謹教小学校

## 『節電大臣』

鈴木 廉

「消費電力三キロワット。発電ゼロ。雪がふるのにソーラーパネルつけるなんて、やっぱり無駄なことだったんだよ。」

と、ぼくががっかりして母に言うのと、母はニコニコしながら、

「地球に優しく、環境のためなんだから。いいの、いいの、節電大臣さん。」と、まったく気にしていない様子でした。

ぼくの住む会津は、二年の半分くらいは雪と共に生活しています。つまり、ソーラーパネルの上には雪が積もり、発電効率がすごく悪いのです。

昨年の大地震の後に、我が家では太陽光発電を設置することに決めました。電力不足の解消や地球環境を守ることに、少しでも貢献できればと家族で話し合ったのですが、冬に雪が降ると発電しないのは、ぼくの予想外のことでした。工事に来てくれた人が、

「雪が降らない地域だと、二年を通して効率がよく発電するんだけど、会津はきびしいな。」

と話してくれたことを思い出します。利益だけを考えるならば、雪深い会津に太陽光発電は、無駄に近い事なのかも知れません。

父は、朝起きると雪かたしのために外に出ていきます。スノーダンブで道をつけないと学校や仕事に行けません。夕方、帰ってきても昼間に積もった雪を、また雪明かりの中、大通りまで片付けます。この大量の雪がとけて、何か他のエネルギーに変わるシステムがあればいい

のになど、雪かたしの手伝いをしながらいつも雪がのったままのソーラーパネルを、うらめしく見上げます。

学校から帰って、ぼくは、パネルのチェックをするのが日課になりました。今日は何キロワット発電したのか見るのが楽しみになりました。他にも、いつも気にしていなかった天気図をみたり、気温を気にしたり、太陽を見上げたりすることが多くなりました。

また、家族も太陽光発電のコントローラーパネルを見ると、即座に消費電力がわかるので、無駄な電気を消したり、使っていない電化製品のコンセントを抜いたり、みんなで同じ時間帯にお風呂に入るようになったりと、少しずつ節電を心がけるようになりました。

目に見えてわかるということは、とても説得力があるなと思います。電子レンジと炊飯器は瞬間的にすごく電力を使うのがわかり、母に使うのを減らしてほしいと言ったら、

「不便になるほど節電しなくてもいいのよ。」

と笑われてしまいました。自分がいかに今まで電気を無駄に使っていたかを反省しました。

無駄だと思っていた太陽光発電は、奇しくもぼくに節電の意味を教えてくれたのです。

一人ひとりが生活を見直し、電気の使い方を考え、無駄な電気を使わないように心がけることが大切であるということを。母がニコニコしていた意味がやっとわかりました。節電大臣として太陽光発電を誇らしく思いました。



# 環境大臣賞

中学生部門

和歌山県 近畿大学附属  
和歌山中学校 2年生

## 『私達の生活と節電』

大久保 有紗

私は最近、山にいるニホンミツバチを観察するために月に一回「根来げんきの森」へ出掛けています。今年の一月から始めてこれまで四回行きましたが、二・三月の真冬の切れるような寒さから、三月の寒いけれど湿った感じ、そして四月の桜や色々な木の花が咲き若葉が出てきたすがすがしい感じなど、今まであまり感じていなかった季節の移り変わりを毎回実感しています。いつも同じ時間に集合なのですが、空の明るさや鳥の鳴き方などが少しずつ違い、季節がめぐっていているんだなと感じます。

そんな中で私がいつも思うのは、エアコンもストーブもない森の中で生活している虫や鳥たちの事です。あんなに寒い吹きさらしの森でどうやって暮らしているのでしょうか。またこれからの暑い夏、熱中症などにならずに生活しているには、どんな工夫があるのでしょうか。

森を管理している方たちに話をきくと、ミツバチなど集団で巣を作って生活している虫は、巣を作る時、朝日が入って中が明るくなり、西日で暑くならないような、東や南向きに入出口がある所を選んだり、夏には葉が茂って雨や日射しをさえぎり、冬には葉が落ちて日当たりが良くなる落葉樹の根元を選んだりといった工夫をするそうです。また真夏の暑い日は集団で羽を動かして、巣の中の暑い空気を外に出して巣ごと冷やす事もするとの事でした。他に、私も気がついたの

ですが、冬は日が高くのぼってから、春夏は早朝の明るいけれどまだ涼しい間に活動を始めている、というのも工夫のつだと思います。

このような自然の環境を上手に生かした生活の工夫は、私たち人間の生活に生かしていけないでしょうか。今年の夏は原子力発電所が再稼働しなければ、十六%以上の電力不足だと言われています。エアコンで中の環境を変えるよりも、ミツバチのように家を丸ごと快適にする、風通しや日当たりの工夫を考えることが「節電」につながっていくような気がします。他にも朝の涼しい時間を利用する、「サマータイム制」などは、どうでしょうか。調べてみると、「日本は湿度が高く、日没後も蒸し暑いため、帰宅後の冷房需要が他国と比べて大きい。」など、反対意見も多く、現在には行われていませんが、公園や川辺、森など自然に涼める公共の場所を整備して夕方戶外で過ごせる様に工夫できないでしょうか。今ある環境を上手につかっ、暑さ寒さを乗り切っている自然の動物達の工夫をもっと知って、「電気」で環境を変える事だけでない生活を考える事が、「節電」の大事な一歩だと思えます。

# 地球こどもクラブ賞

静岡県 西遠女子学園中学校2年生

## 『二人の二歩から』

古山 佳保里

「電気消しなさい！」

「またつけっぱなし!!」

毎日のように母が口うるさく言うのをほとんど無視して、それほど切実に受け止めていなかった。あの震災がなければ、節電について深く考えたことなどなかった。しかし、連日報道されるニュースは、電気のない生活の不便さを伝えるものばかりであった。いかに現代の私たちが電気にたよった生活を送っているのか思い知らされた。原子力発電所の事故により、電気の供給量が減り、日本全土が節電ムードにかわった。企業が休日をずらし、1日の消費電力の調節をはかった。イルミネーションや街灯の明かりが減り、街が暗くなった。家庭でも節電という言葉をひんぱんに使われるようになった。

去年の夏、私の住む浜松は、大きな台風の影響で停電がおきた。長時間に続き、我が家はオール電化なので、すべての機能がストップしてしまった。ちようど勉強をしていた私は、とり合えず日が暮れるまで窓ぎわに場所を移し、ちようどそくをつけた。しかし、しだいに暗くなり、ちようどそく一本の明かりではとても暗く、そのうち勉強もできなくなった。このまま晩中電気がつかなかったらどうしようという不安がよぎった。結局、夜になっても電気は復旧せず、みんな二部屋に集まって、ちようどそくの明かりの中で、母がカセットコンロで作った夕食をとった。ちようど夕食を食べ終えたころ、急に電気がついて、思わずみんな

で拍手してしまった。数時間の停電がもっとも長いものに感じた。電気のない不便さを身をもって体験した一日だった。被災地の方々はこの何倍もつらい思いをしていると思うと胸が痛んだ。

夏休みの間、私は日常生活の中で、一日にどのようなところでどれくらいの電力を消費しているかを、家庭用の太陽光発電の測定機で観察した。まず、エアコンの設定温度を変えてみたり、ドライヤーやテレビ、掃除機のスイッチをつけたり切ったりして、使用している電気量を比較した。電化製品の一台が消費する電力は、小さいもので0.3kW、大きなものでは1.5kWを超えていた。夏日の消費量は多いときで60kWであった。だが、エアコンなら、設定温度を低く、ドライヤーや扇風機を強から弱へ変えれば、当然電気消費量は減る。使っていないコンセントを抜くだけで、わずかに使用量が減るのが確認できた。誰でも簡単にできる何気ないところから、私たちが協力することで、大規模な停電は防げるのである。私自身も最近では母の言葉も耳にとまるようになった。何をすることも口だけでは始まらない。危険な原子力の力も必要があるかどうかは分からないが、少しでも原子力の力に頼らないようにするためにも、二人の責任をもった行動が大切である。